
陰陽師はじめました

ライトハウス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

陰陽師はじめました

【Nコード】

N9305Z

【作者名】

ライトハウス

【あらすじ】

ごく普通の中学校に通う
進藤優斗は母の仏壇においてある
一枚の紙を見つけた日を境に
陰陽師としての生活が始まる…
得体のしれない妖と戦っていく毎日に変わる
果たしてなぜ優斗はこの世界につれて来られたのか…
非現実的ストーリーである

第一話 進藤優斗

「ただいま、つても誰もいねえか」

俺の名前は進藤優斗地元の中学校に通うごく普通の中学二年生だ。

俺は小6ころに母親を亡くしていて

今は父親との2人暮らしだ。と言っても

父親はほとんど家にはいなく

お金が置いてある。これでいつも夜ご飯をすましている。

昔は家に帰ればいつも母さんが料理を

作って待ってくれていた、母さんの料理は

どれも美味しく毎日が楽しみだった。

だけど今は…

とりあえず腹が減ったので

冷蔵庫を開けてみた、予想通りあるのは

牛乳、ビール、昨日コンビニで買った

食いかけの焼きそばしかなかった。

仕方なく今あるもので我慢した。

「いつからこんな生活になってしまったんだろうな」とつぶやいていると

自然と母さんの仏壇の前に足を進めていた。

母さんの写真を手にとり眺めていた。

「母さん…」写真を元の場所に戻そうとするとそこには紅蓮色に染まっている

一つの紙が置いてあった。

今まで写真の裏にあり気づかなかったんだろうと思いきその紙を手にした瞬間、頭に強烈な痛みが走り俺はその場に倒れた。

気が付くとそこは見渡す限りの広い
草原だった。

「ここは何処だ…」と言ったその時

「ウウウグガア」と何かの唸り声が聞こえる

振り向くとそこにはこの世のものとは

とても思えないいびつな形をした

生物がいるではないか。

テストの平均点が24点の俺でも一目で危険だと分かるほどのオラだ。

「こいつは何だ…」俺は一目散に逃げた

だがその生物は想像以上に素早い。

「ダメだ、追いつかれる」どんどん距離が

近づいていく、死を覚悟したその瞬間

俺の手が赤く光り出す。

「何だこれは…」俺の手の中にはさっき仏壇の中で見つけた紅蓮色の紙がある。

化け物が近づくとつれて光りはどんどん強くなる、そして俺と化け物の距離が

一メートルほどになった時光りは

化け物を示しそして化け物は一瞬で燃え尽きた…

「何だこの紙は、そしてここは何処だあ？」

謎の少女「あいつ妖を倒しやがった…いったい何ものなんだ…それに陰陽師の札も

持っていてやがるし、面白いやつだ」

第二話 異世界

俺はこの草原をひたすら歩いてきた。

だが街など見つかりそうもなく俺は

一度休憩をする事にした。

「あの化け物はなんだったんだ…」

そしてこの札はなぜ母さんの仏壇の中であつたんだ…」今までの事を振り返っていると

後ろから声が聞こえた。

「またあの化け物か？」俺が身構えると

「そんなに警戒しないでよ！」

私は味方だよ」そこには俺と同じ年ぐらいの少女が立っていた。

「君の戦いぶり見せてもらったよ。中々のもんじゃない、けどまだまだ使われていないようだね！」

そう言われた俺は疑問ばかりだ

「まずお前は誰だ、そしてここは何処だ

この札もあの化け物もいつたいたいなんなんだ？」

「人にものを尋ねる時はまず自分からって

言うじゃん（笑）」

「俺の名前は進藤優斗」

「わたしの名前は秋本光、そしてこの世界は

異世界

Another World、妖とそれを倒す者たちがいる世界よ」

俺は一瞬で分かった、さっきの化け物が

妖なんだと…

「この札は？」と俺が聞くと

「その話は歩きながらするわ、とりあえず

わたし達のアジトへ行きましょう」

俺は光の後を追って行った。

「まず何から話そうかな」

「この世界について教えてほしい」

「分かったわ。さっきもいった通りこの世界には妖と呼ばれる生物がいるの。」

そいつらはみただけで危険とわかるように

行動も危険なの、簡単に人を殺す

ような冷酷なやつなの…

そして私達はその妖を退治する

陰陽師なの。あなたが持っているその

札は陰陽師の札なの、どうしてあなたが

それを持っているかはわからないけど

それは妖を除去する働きが込められているの」

そっかだからあの時俺はあいつを倒せたんだ…

「この世界には陰陽師以外にも武闘派、

武器使いの2つのグループがあるわ

陰陽師も入れてこの3グループはどれも対立関係にあるの」

「どうして、仲間なら協力すればいいのに…」

「それは出来ないの…最初は協力していたの

だけどある事に気付いたの」

「ある事…なに？」

「妖をたおすとその亡骸の上には秘宝が

置いてあるの…その秘宝は倒した人の使う

スタイルによつて変わるの、例えば陰陽師が倒せば札が武闘派が倒

せば新たなスキルが

武器使いが倒せば特殊な武器が…

それを知ってからのはどのグループもその秘宝を狙った。そして気が

付けばグループどうしでの戦いも始まるようになったの」

「なんか複雑な話しだな」

「うん、着いたわよ。ここが私達のアジトのある街ウィステラよ」

「なんて広い街なんだ……」俺は啞然とした
ままその街を見渡した

第三話 陰陽師はじめました

俺は啞然としたまま一步も動けなかった。

光とともに広い草原を抜け辿りついた街

“ウイステラ”それは想像を絶するほどの
素晴らしさだった…

「ねえ行こう？」俺に問いかけてきた光

俺が一步も動かないので不思議な顔を

していた。

「ううん」

ウイステラはとても賑やかな街だった

広場に着くと商人達の声、子供達のはしゃぎ声などが絶えず聞こえてきた。

「ここは賑やかな街だな」

異世界

「ウイステラはね Another Worldの中で三大都市と呼ばれるほどの広さを誇っていて

一番平和で賑やかな街なんだよ？」

「そっか〜ところで陰陽師のアジトは何処にあるの？」

「ここだよ？」光の指の先には

三階だての少し古臭さを感じさせるが

がっしりと立っている建物あった

「ここがアジト…」俺は緊張し始めてきた

この先にいるのはきつと…

~~~~~ 優斗の想像~~~~~

「南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏」

「死者よ安らかに眠れー？」

優斗「怖ええ〜」

~~~~~

陰陽師ってこんな感じだよな…

だけど光を見ていると俺の想像とは違うような気がしてくる…

「なつなにジツと見てるのっ？もう行くよ？」

そういうと光は顔を真っ赤にして

中に入って行った。

「ちよつと待てよ？」俺も後を追い扉の前で

深呼吸をして扉を開けた

そこは俺の想像をぶち壊す世界だった…

「おゝいビールをくれ」

「おお新人かゝ宜しく」

「光おかえりなさい」

とても賑やかだった…

「どうしたの優斗？」俺は光の一言で

正気に戻った

「陰陽師ってこんなに賑やかだったんだな」

「そうだよ？陰陽師は仲間思いで賑やかなんだよ？それに比べ武闘

派は一匹狼の集まる

冷酷な奴らなんだよ」光は感情を強めて言った

「陰陽師と武闘派の間に何かあったの？」

「うん、それはね…」すると光の声をさえぎるように低く太い声が

光を呼んだ

「光、そしてその若僧こっちに来い」

「あつマスターだ」

「マスター？誰だそれは」俺は尋ねた

「各グループにはそのグループをまとめる

マスターと呼ばれるリーダーがいるんだよ」

その話を聞きながらマスターの前に足を進めていた。

「おい若僧、お前の名はなんだ」

「進藤優斗」

「進藤か…（こいつなんだ…ただならないオーラを感じるぞ）ここにきたからには

覚悟はできているんだろうな」

「覚悟？」

「陰陽師となり妖と戦う勇氣はお前にはあるのか」

「ここまで来たらならなきゃいけない

空気だな…「分かったよなつてやるよ」

こうして俺の陰陽師生活が始まった

第三話 陰陽師はじめました（後書き）

第三話が終わりました！

ようやく陰陽師になりましたね…（笑）

そこでここからもっともっと言い作品を作りたいと思つたので意見、感想などを

聞かせていただけたら幸いです！

これからも宜しくお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9305z/>

陰陽師はじめました

2011年12月29日16時49分発行